

# 熊山遺跡

～吉備を東から見守ってきた謎の遺跡～

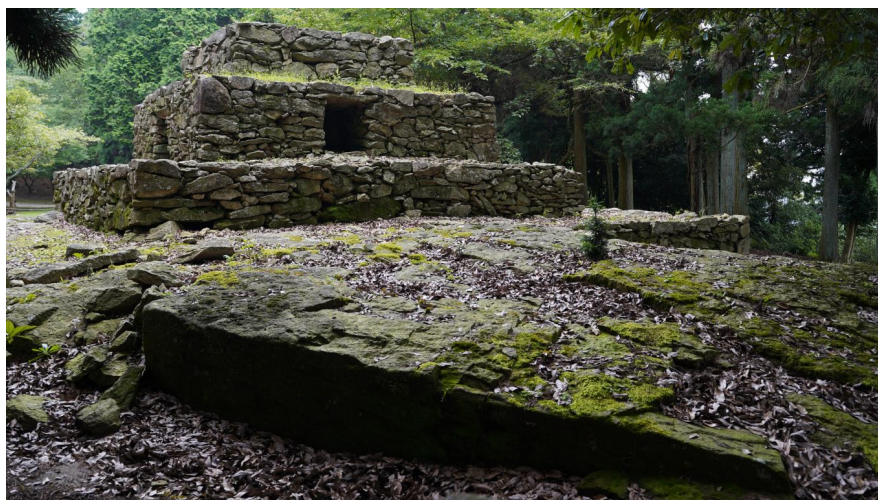
## 目次

1. おすすめポイント
2. 説明
3. 現地写真
4. 「鳥の目」で
5. アクセス

資料  
番号

K17

初版：2025.11.08



## 1. おすすめポイント

### ★「聖なる場所」の上に建てられた謎の積石段

山の頂にある岩の露頭は「聖なる場所」の典型です。  
是非、基壇にも注目してください。

### ★ 展望台からは瀬戸内海、遠く四国まで望めます

# 国指定史跡 熊山遺跡

管理団体 岡山県赤松市  
指定年月日 昭和三十一年九月二十七日

この遺跡は、熊山山頂（五〇メートル）に在って、全国に類をみない石積み遺構である。ほぼ、方形の基壇の上に、割石をもって三段に築成している。第一段は南面が狭く、北面が広い台形、第二段は、南面が広く、北面が狭い台形になっている。第二段の四側面の中央に龕が設けてある。第三段は、方形であるが、中央部分に大石で堅穴の蓋がしてある。

石積の中央には、堅穴の石室（約二メートル）が作られていて、その石室に陶製の筒形（五部分に分けられる）の容器（高さ一・六メートル）が収められていた。この陶製の筒の中に、三彩釉の小壺と文字が書かれた皮の巻き物が収められていた。と伝えられている。

陶製の筒形容器と三彩釉の小壺からみて、本石積遺構の築成年代は、奈良時代前期で、三段の石積の仏塔と考えられる。

また、熊山山塊には、現在大小三十二基の石積の跡が確認されている。国指定の石積遺構に類似しているが、築成の目的、年代、築成者などは異なるものと思われる。



平面

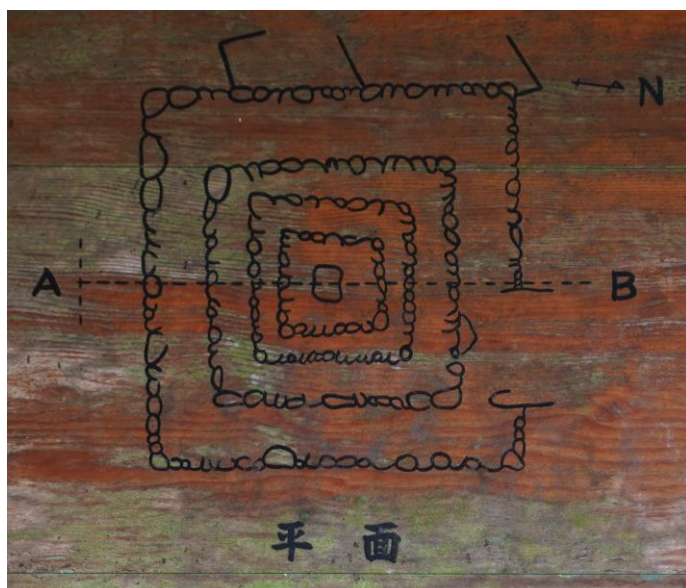


断面 (A-B)

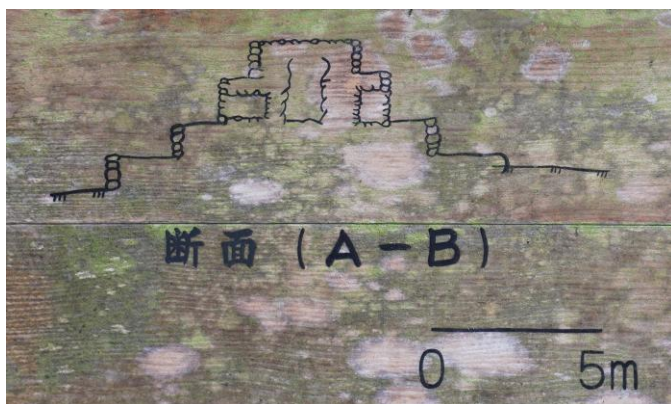
0 5m

現地説明板

2-1



平面



断面 (A-B)

0 5m

2-3

2-2

説明板左側の平面図と断面図を拡大



下枠内 参考文献1「八木敏乗, 岡山の祭祀遺跡(岡山文庫 145). 日本文教出版, 1990, p116~117」より引用させていただきます。

## 熊山

赤磐郡熊山町宇奥吉原

遺跡は山陽本線、熊山駅と、赤穂線伊部駅のほぼ中間に位置する熊山(五〇八<sup>メートル</sup>)山頂にあり、頂の少し南を南北の境界として、大別としては、北側は熊山町南側は備前市の行政区に分けられている。

この遺跡(国指定史跡)は吉備高原以南から南備にかけての最高峰、熊山の頂にあり、ほぼ同緯度に、西へ高倉山(四五八<sup>メートル</sup>)、金山(四九九<sup>メートル</sup>)、岩屋の大墓山(四四四<sup>メートル</sup>)、総社の正木山(三八一<sup>メートル</sup>)があり、これらは古代吉備文化の栄光を支えた拠点(聖山)として、共に神座(磐座)の鎮まる山々である。

この熊山地域は南方、牛窓の黄島、黒島、日生諸島の島々、また深く湾入した片上港など、これらの立地は早くも先土器の頃から人跡が見られ文化の息吹が根付いた所でもあった。奈良、平安の頃、山岳仏教の隆盛時には、西北の石蓮

ぜか熊山のみ、現在その遺跡の姿が見当たらない。奈良期の頃、この山頂で何らかの目的で、国内で全く異類とされる、祈り祭りの場の設定が必要になり。まずどこよりも聖域を選び、その内でも、より聖なる地点が選ばれたであろう。その位置は、当時、古来からの神座、すなわち、天地の接点(神位の座、「磐座」)で、今その古代の神座の上に、熊山遺跡が設けられていると考えられる。この遺跡の謎の部分で、特にひかれることの一つに、中央竈の中に安置されていた、陶製筒形容器(現、天理博物館蔵)がある。

この容器は、この遺跡の心(目的、機能)を象徴するものとすら考えられ、この筒形容器が掘り出された時、容器の中に奈良三彩の小壺と皮に書かれたとする、一巻の経典(現在、所在不詳)が在ったと伝えられている。臆測が許されたとすればその経典には、遺跡建立の願文が記されたためられていたのではあるまいか。

以上について、その時代と、その手法の良

寺(熊山町)と南西の大廻・小廻山(岡山市草ヶ部)と共に、当時の盛大な面影がしのばれる。

遺跡は山頂の巨大な露頭岩盤の上にその底敷、一辺約十二<sup>メートル</sup>四方の三段積(総高約三・四〇<sup>メートル</sup>)石積遺構が現存し、その構造形式は国内では、全く同一形式のもの無く、その構築の目的なども、今日に至るも不明で、戒壇、経塚、仏塔、高僧墳墓、修験関係遺構等々、諸説あり、この遺跡に触れた論考や、資料としての文献発表などは、三〇例に近くあり、古くは江戸期、大亮軒の「和気綱」、「吉備群書集義」(一七〇九年)を始めとして、多くの文献中にみえる。

この熊山遺跡の下部には、この山の山頂部ではこの位置のみに見られる自然岩盤の巨大な露頭(東西二二<sup>メートル</sup>×南北一八<sup>メートル</sup>)が敷かれており、この岩盤部分の形状等からの推測では、現在の遺構高(三・四〇<sup>メートル</sup>)の少なくとも、 $\frac{1}{2}$ 以上に達する岩頂位があったものと想定される。

県内各地で多くの古代祭祀遺跡を視るが、な



国指定石積遺構  
出土陶製筒形容器

似た近い例が、もう一つ県内笠岡諸島の大飛島遺跡(昭37<sup>年</sup>昭38<sup>年</sup>・発掘調査)にある。これは第七次遣唐使船派遣の頃(八世紀初頭)より、国規模の国家祭祀の場として登場した、大陸及び官用筑紫往來の、海上航行安全祈願の目的に国が設営した国家祭祀の齋場であったとされた。この遺跡にも又、熊山遺跡同様に、発掘に際し、地中最下部(第八層)から、周囲を巨石で囲った陶製大甕の底から、奈良三彩の小壺と、小石一個が出たことが発表されている。熊山と、そして飛島は共にその遺跡の持つ個性(立地、目的、機能等)は違っていたとしても、目に見えぬ無限の力に願いを托した古代の人の心に変わりはなかったのであるまいか。

以下、吉備鳥瞰管理人コメント・・・

本遺跡、一見4段に見えますが一番下の段は岩盤と合わせて平面を造るための基壇です。で実際には3段構造です。上記、八木氏の解説にもあるとおり基礎となる岩盤は「近隣では最高峰」の熊山の頂に現れた巨大な岩の露頭ですので、もうそれだけで十分に磐座となり得たはず。その「聖なる岩」の上に造られていることから、何か強い「思い」が感じられます。

また、現地説明板に記述されているように、3段の石積みは正方形ではなく“意味ありげ”に不等辺となっており、その意図に興味を惹かれます。どのような情念で・・・？





**3-1** 本遺跡に至ると最初に目にするのがこのアングル  
一見4段に見えますが一番下は基壇ですので実際は3段です



**3-2** このアングルから見ると、岩盤の露頭に基壇高さを合わせていることが解ります  
3段構造も明らか





3-3

岩盤露頭の巨大さに驚かされます

竈（がん）の一つ



3-4

展望台に掲げられている写真



3-5

遺跡すぐそばの展望台からは天気が良ければ、遠く瀬戸内海や小豆島、更には四国も見えます。



# 4. 「鳥の目」で

2020.9.6



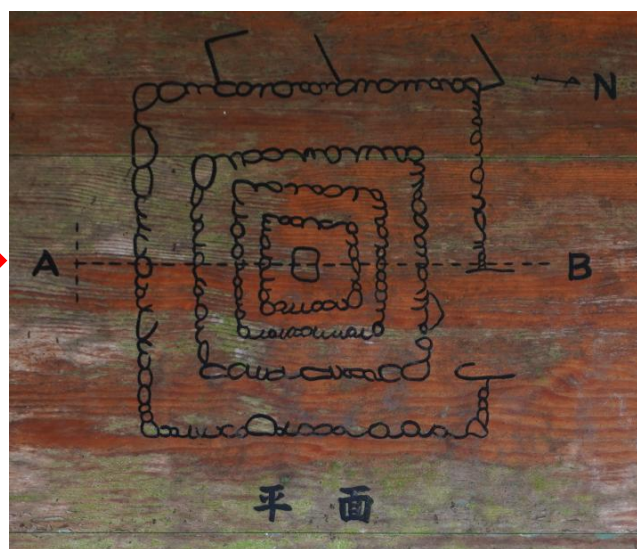
4-1

西南西を望む



4-2

意味ありげな不等辺四角形



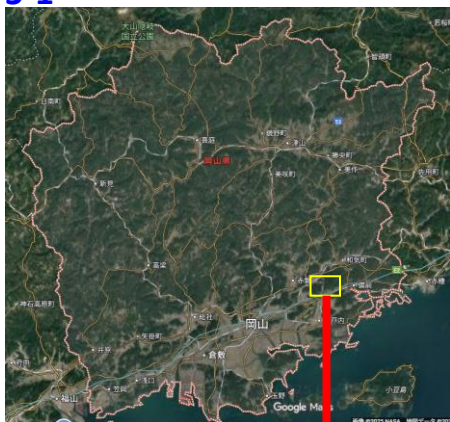
4-3

現地説明板より平面図抜粋（図2-2と同じ）

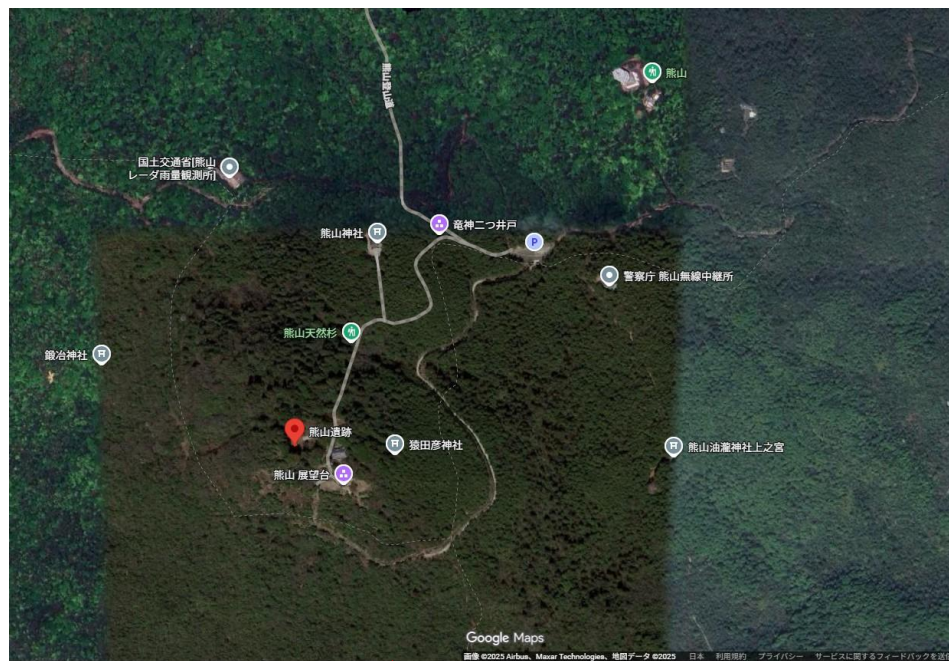


# 5. アクセス

5-1

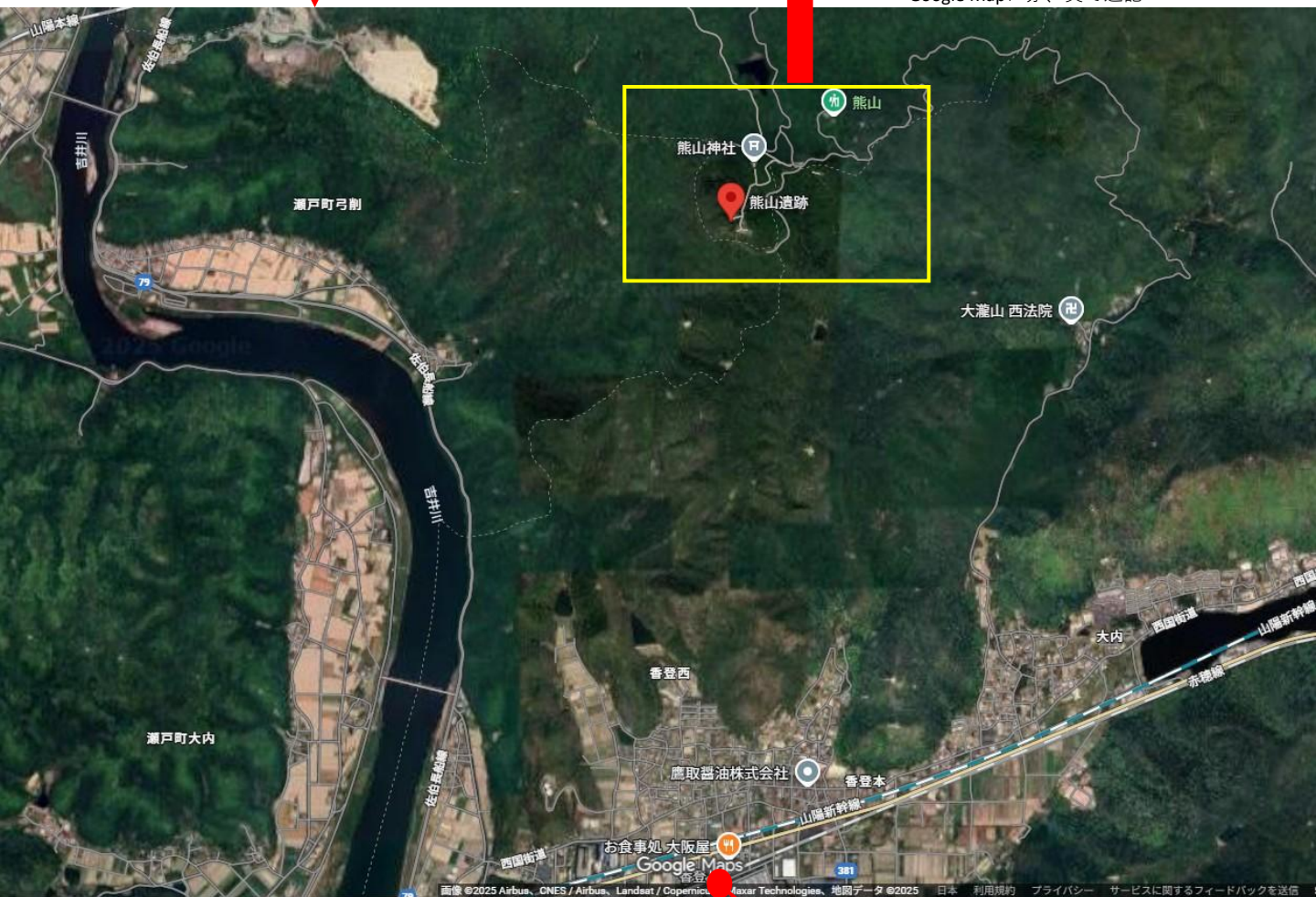


Google Map



5-3

Google Mapに赤、黄で追記



5-2

## 参考文献

- 1) 八木 便乗. 岡山の祭祀遺跡（岡山文庫145）. 日本文教出版, 1990, 173p.